

【危機管理プロジェクト研究】  
特別研究会報告要旨（2005年2月1日）

## 異なる食品リスクに対する消費者の 認知と姿勢

（オランダ・ワーヘニンゲン大学）

Lynn Frewer(リン・フリーワー)

消費者の食品リスク認知は、消費者の態度や行動を決定する。たとえば自分ではコントロールできない強制的リスク、より悲劇的なリスク、多数の者に影響を与えるリスクへの懸念は大きい。また、より恐ろしいもの、より親しみのないものを脅威と感じる。個人によっても不安の程度に差が出るし、子供、高齢者、ある民族といった特定グループに不利益が集中する場合、不安は大きい。さらに様々なリスクと便益への認知は国や文化によっても違いが見られる。

こうしたリスク認知が消費者の信頼感とどのように関係するかをみるには、WHOの「リスク分析」の枠組みが役立つ。これは次の3要素からなる。すなわち「リスク評価」(技術的なリスクの評価)、「リスク管理」(リスクに関する政治的な決定)、「リスクコミュニケーション」(利害関係者によるやり取り)である。最近、消費者もインターネットでさまざまな情報が得られるようになり、専門家の決定のみに依存する状態でなくなってきている。さらにリスクは社会的に増幅される。では「リスク分析」の透明性を増せば信頼性を確保できるのだろうか。透明性が増すと提供情報の多くが一般大衆の目にさらされる。すると「リスク管理」が自分のコントロール外にあることがわかる。透明性が増せば増すほど追加的なコミュニケーションが必要となり、利害関係者の関与もより求められるようになるので、必ずしもそうとはいえない。しかし、透明性が低くなると信頼も失われるのは確実である。

それでは食品の安全性はどのように広報・規制されているのだろうか。英国のBSEを例にみると、消費者の懸念を拡大した原因は96年以前に政府がクロイツフェルトヤコブ病の原因となる可能性を認知しなかったことであ

る。BSEは消費者のコントロール外にあった危険性であり、消費者の懸念に対する情報提供が行われなかったことは、消費者のリスク認知に影響した。また、メディアがリスク認知を増大させる力もあった。現在、我々は食品安全に関して何が消費者の信頼を構築していくかというモデルをつくっており、消費者の行動決定に何が影響するか、そうした事象がどのように相互関連しているかを理解し始めたところである。

最後に、食品の安全性を自然科学・社会科学の両方の観点から考える。前者の観点からは、農場から始まるフードチェーンの最後に消費者があるが、このうち小売りから消費者までの間には微生物汚染などの不確実性が大きい。後者の観点からみると、消費者が不確実性などの情報を得てそれが知覚されたリスクとなり、そのうえで最後に消費者が食品を消費する。こうしてみると、消費者の段階で自然科学と社会科学とが重なっている。したがって食品安全についての研究は、自然科学と社会科学が統合した形で行われるべきであると考え。つまり、細菌汚染、毒性に対する自然科学に基づきつつ、食品リスクに関する一般消費者の懸念に対しては「リスク分析」のプロセスのなかで消費者との対話を行っていくことの重要性を理解する必要がある。

(文責 山本昭夫)

【多面的機能プロジェクト研究】  
特別研究会報告要旨（2005年2月16日）

## EUにおける農業の多面的機能、農村開発、 そして政策の動向

Multifunctionality, Rural Development and Policy  
Adjustments in the European Union

（イギリス・アバディーン大学）

John Bryden(ジョン・ブライデン)

多面的機能とは、あるものが生産されるときに、その生産活動により同時に生産される副産物（または結合生産物）を認識するため